

東京の「きぼうのいえ」

最後に行き着く避難所

JAPAN TIMES 2006年2月12日

おたけともこ（専属記者）

凍えるような冬の朝9時、山谷・・・東京の東部にあり、かつて日雇い労働者のメッカとして有名だった、荒れた下町地区。今ここは福祉に頼る年老いた何千人もの男性たちのホームとなっている。

この時間にすでに、地元の軽食堂は酒の缶をしっかりとぎった、くたびれた老人男性たちでいっぱいだ。外では別の数人がしゃがみこみ、早朝の集会を楽しんでいる。いくつかのみすぼらしいドヤ（何一つ飾り気のない宿）を過ぎて2、3辻行くと、道端で、寄せ集めの服を着た男たちのグループがサイコロを振っている。ずっとその間、黒い、膝までのダウンコートを着た男が、余所者の私の動きを静かに目で追っている。

（写真説明）きぼうのいえ（HOUSE OF HOPE）—— 東京の下町、山谷地区にある、高齢になり、弱り、不運に見舞われた人々のためのホスピス——その頂上にある十字架は、東京の山谷地区のみすぼらしい通りを見はらしている。

物理的にはこの戸外のカジノからちょうど通りを渡ったところに、しかし別の観点では何年もたったところに、きぼうのいえ（HOUSE OF HOPE）はある。2002年の10月に、山本雅基さんとその妻美恵さんの手で開設され、21部屋があるこのホスピスは、ホームレスで、家族の絆を持たず、そして死に瀕している人たちのための、文字通り最後に行き着く避難所である。厳しい皮肉であるが、その人生がずっと愛や共感を欠いてきた入居者たちが、この死に瀕した渡り道を滑り落ちる前にはじめて、愛と共感の両方をふんだんに受け取る場所なのだ。

1990年代半ば、山本さんは、東京の上智大学で神学を学ぶかわら、「家族のいえ」—— 深刻な病の子どもたちが、自宅を遠く離れて病院で患者としての治療を受ける間、その家族が滞在できる施設——を建てる、全国的なキャンペーンを始めた。彼が語るには、4階建てで屋上には小さなチャペルのある きぼうのいえ は、彼の長い間のホスピスの理想を具体化したものだという。

「日本では、ホスピス運動は1980年代に、大阪と静岡県浜松の、キリスト教的精神の病院で「緩和ケア部」が開かれたことに始まります。でも私は長いこと密かに、ホスピスにもっとロマンティックな理想をいできてきたんです。」山本さんは語り、差し迫った死

に直面している人たちだけでなく、社会の隙間に落ち込んでしまった人、または「社会的な信用を使い果たしてしまった人」にもケアを提供しているのです、と続けた。

山本さんは、このホスピスは「病気のデパート」みたいですよ、と冗談で言う。70人近くの、HIV や癌から心臓病、パーキンソン病、統合失調症に至るあらゆる病気の患者たちをこの家に住まわせてきたからだ。多くの人たちは、「ソーシャルワーカーたちが「申し訳ありませんが、この方を引き取っていただけませんか？」と言って、病院から」紹介されてくる人たちです、と彼は言う。

きぼうのいえはまた、「健康」だが他に行き場のない人たちの一時的な避難場も務めてきた一たとえば、人格障害があつて、しかも3番目の子どもを妊娠しており、しかしその家族は、彼女が上の2人の子どもを放棄したために彼女を受け入れない、という女性などである。

きぼうのいえの平均滞在期間は約6ヶ月である。そして、これまで、山本さんは30人のお葬式をとりおこなってきた。

「おかしいことですが、お葬式を主催するのには、慣れるんです。」山本さんは静かに語った。最近、台湾生まれで80歳で肺癌で亡くなった男性のお葬式に行ったばかりだった。彼は路上に倒れているのを発見され救急車で東京の病院に運ばれたが、誰も彼について、名前と国籍以外の何も知らなかった。そして、スタッフが彼の死後、その部屋を片付けていると、10数枚の色あせた写真を見つけたのだーそれには、彼に似た若い男性が、女の赤ちゃんを抱いている写真も含まれていた。

事実、きぼうのいえの入居者たちは、あらゆる人生行路をたどってやって来る。さまざまな色どりの、しかししたいいは心を痛ませる人生の物語を負って。

(写真上) 入居者たちが、毎週開かれるお茶とコーヒーの集いで、懐かしい音楽を聴いている。

(写真中) 末期の肝臓癌の入居者が、自室でテレビをじっと見ている。

例えば、入居の柴田さんのしてきた仕事を全部跡付けられる人はだれもないだろう。彼はただそれほど多くの仕事に就いてきたのだ。

72歳の柴田さんは、こう語ってくれた。未婚の芸者のもとに生まれ、東京の下町、浅草近辺にそだったが、第二次世界大戦中、10歳ほどで孤児になり、山口県の岩国にある母の実家に疎開した。

そこで、8月6日のこと、彼は巨大なキノコ型の雲が空に上るのを見たのを覚えている。広島に原爆が落とされた時のことである。

そのころの時代は特に厳しかった。柴田さん—いまは視力を失い、深刻な免疫疾患にかかっているのだが—は、時々木の根を食べて生き延びたよ、と言う。戦後の東京で、彼もまた闇社会に手を出していった。不運なことに、ヒロボン（メタアンフェタミン）—当時はよく出回っていた興奮剤—の商売で捕まったあと、彼はすぐに少年院に投げ込まれた。

柴田さんは続けるが、いったん真面目な堅気にもどって、床屋の資格をとるために独学で勉強し、そのあとは正式な料理人になったという。こうして彼は神奈川県で、おでん（煮込んだ食べ物）の、間に合わせの屋台をもつことになった。そのあと、タクシーの運転手、映画スタジオのカメラマンとエキストラをしながら切り詰めた生活をしてきた。彼はまた、捕鯨船の乗組員もし、サンフランシスコからニューヨークやサンパウロにいたる、世界中も回った。

こういう多彩な背景の持ち主だが、柴田さん—派手なスポーツジャケットとジーンズを好む、背丈の低い人—は、きぼうのいえの毎週のお茶会の親しまれた常連だ。このお茶会では、入居の人々は互いに、またスタッフとおしゃべりをし、石原裕次郎のような1950年代、60年代のスターの、甘い旋律に耳を傾けている。

もっと寡黙な入居者たちもいる。それはその人に語る話がないということではないのだが。

そんな一人が、佐藤安正さん、87歳である。この人は、かつてヒロボンを使った多くの日本人の一人だが、佐藤さんの場合は1950年代初めに3年間ほど、東京タワー建設で溶接工として働く間、高所恐怖を克服するために使ったのだった。

（写真下）ハープ奏者キャロル・サックさんが、91歳の入居者のためにメロディをつま弾く。

それ以前、佐藤さんは日本帝国陸軍の軍人で、満州、フィリピン、シンガポールの戦闘に加わった。そのなかで、マレー半島の深いジャングルからの奇襲攻撃で、英軍の頑丈に守られた要塞を攻め落とした軍の一員だった。敵方は、その側から接近できる戦闘勢力はあらずがない、と誤った推定をしたのだ。

「みんなその時は気が狂っていたよ」佐藤さんは言う。肩幅の広い、今は盲目になってい

る男性である。ベッドの傍らに座り、戦争を思い起こし、こう言う。本当にほとんどずっと「どうやって人を殺すかだけを考えていたなあ。」

佐藤さんは戦争の終わりに捕虜となり、その後10年間を、シベリアの捕虜収容所で何とか生き延びようと苦勞しながら過ごした。長い年月の間、何度も自殺しようとしたと言う。一番最近は、このホスピスで、クローゼットの中でスカーフで首をつろうとした。

「だけど、スカーフの結び目が解けてね、床に頭をぶつけて終わったんですよ。」このホスピスで働いている佐藤治子さんは言い、彼女と同じ苗字のこの高齢男性を、まるで自分のおじさんのように、しっかりと見つめる。

(写真上) 山谷の道端で、住人たちがサイコロをふる。

(写真中) 病気をもった柴田さんと、彼が殆ど知らない家族のため、ありあわせで作った部屋の祭壇。

(写真下) ホスピスの近くのホームレスの寝場所で、一人の男性が安い酒をがぶのみしている。

佐藤さんは腹部に深い傷をもっている。東京の靖国神社で、明治時代の大村益次郎陸軍大臣の像の前で切腹をしようとしたからである。

「何でって？日本人だからだよ！」何故そうしたのか尋ねられて、彼は大きな声で強い調子で答えた。「おれは日本帝国陸軍の軍人で、万一捕虜になったら、切腹しろと教えられたんだ。戦争に負けたのに、日本に帰ってきて、悪かったと思ったよ。」

「でも死ねなかったね。腹に刀を突き刺すだけじゃ死なないんだよ。そんなに痛くもないよ。・・・意識が戻ったとき、病院のベッドの上だったよ。」

多くの入居者のもつれた人生に対処していくのは、看護婦として働いている美恵さんのような、きぼうのいえのスタッフにとって、決して易しい仕事ではないのは驚くことではない。

美恵さんは言うが、入居者の身体的、精神的な安寧に気をつけるだけではなく、その他のいろいろなやり方でも彼らの面倒を見なければならないそう。これまで数え切れないほど、返済していない負債の泥沼にはまった入居者と、脅迫の手紙を送ってきたり、彼女が代わりに徴収するよう電話をかけてきたりする借金取立てのやくざたちとの間に立ってき

たという。

だが、美恵さんは天使のようなほほえみと声をしながら、強くなれるものだわ、と言う。

「やくざが電話してきて、入居者と話がしたいと言った時、「この方は寝ていて、もうすぐ亡くなりそうなんです」って言ったこともあります」、とくすくす笑いながら言う。「別の時は「この患者さんをひきとって下さいますか？」って言ったんです。」

しかし実際のところ、お金はきぼうのいえにとって、笑い事ではない問題だ。このホスピスは政府や自治体から全く資金を受けていないからだ。代わりに、入居者からの料金に頼らなければならない一月々の福祉の支給費から、大体ひと月に15万円ほど、部屋代、食事、施設費に払っている—そして食品、衣類、生活用品の寄付にも頼らなければならない。それでも、年間に1千万円ほど支出が収入より上回っている。（*もしかしたら原文では逆の意味かもしれません。）

寄付のほか、このホスピスは、東京を本拠地にした、ルター派伝道師で、ここで毎週一度「ミュージックサナトロジー」を実践しているキャロル・サックさんのような、献身的なボランティアの善意に大きく頼っている。

このミネアポリス生まれの人は、オレゴンを本拠地にした休息の杯プロジェクトによる、集中的な2年間のコースを経た後、ミュージックサナトロジストの資格を得た、わずか50人の中の1人である。このプログラムでは、病で終末期にある人の身体的、精神的、霊的苦痛を和らげるため、どのようにハーブを演奏するかを学ぶ。

サックさんは入居者の方たちといくつも奇跡的な経験をしてきた。彼女は思い起こして語ってくれたが、あるとき、ある末期癌の、誰に対しても敵意に満ちて意地悪なので知られていた男性に、彼女はケルトのハーブを弾いた。その人の脈拍や呼吸に共振するようにあつらえられた、何曲か選んだものを弾いた後、彼は完全に別人のように変わった、と言う。

「この方は寝てしまったと思いました。そこで、だいたい45分くらいのあと、私は演奏をやめました。」彼女は回想して語ってくれた。「でもそのとき、彼は起き上がって、私の手をにぎり、泣いて、「ありがとう」と言ったんです。」

「彼は「私の生きてきた中で、こんなに安らかに感じたのは初めてだよ」と言ってくれました。」

彼女が2週間後再び訪れたとき、彼はちょうど数時間前に亡くなったところだ、と告げられた。だが、彼は彼女が訪ねた時以来、「180度変わって」、皆に感謝するようになったとも知った。

「私たちは、神様がいつ小さな親切を取り上げて、1000倍にもしてくださるか、決してわかりません。」彼女は言う。「これがその日に起こったことです。それは私ではありませんでした、絶対に私の演奏でもありませんでした、なぜならそれは本当に単純だからです。」

このホスピスの設立者、山本さんは一彼は妻と、脚の一本がまがった黒猫と共に、ホスピスの隣に住んでいるのだが一彼から見ると、入居者の人たちと、スタッフ、ボランティアたちの関係は、上下がなく、個人的で、——支配従属的ではない、と言う。山本さんは、良い日々があったように、悪い日々もあった——きぼうのいえを開いてから3回、神経的に破綻したこともある、と認めるのだが、きぼうのいえを、彼や奥さんを含むだれにとっても、その最後の日々を幸せに過ごせる、ある種のいえとして保っていきたい、と強く語る。

「以前、点滴をつけたまま、近くのパチンコ屋に行った男性がここにいました。」山本さんは言う。「たぶん、そんな自由が認められる日本で唯一のホスピスだと思います。」

より情報を得たい方は、きぼうのいえに連絡をとってください。電話03-5808-0888か、ファックス03-3875-7525 または、サイト www.kibounoie.info
THE JAPAN TIMES 2006,2,12 版權所有

(以上 平山満紀訳)